

令和 2 年 6 月 29 日現在

機関番号：15101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13408

研究課題名(和文)英国小説における意識描写の通時的事例研究：自由間接思考の歴史的変遷

研究課題名(英文) A Diachronic Approach to Representation of Consciousness in English Novels: Historical Development of Free Indirect Thought

研究代表者

中尾 雅之 (NAKAO, Masayuki)

鳥取大学・地域学部・講師

研究者番号：00733403

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、主に英国小説における意識描写の歴史的変遷の一端を、自由間接思考(Free Indirect Thought: FIT)の形式・意味の通時的な変化に焦点を当てて考察した。特に、先行研究の少ないモダニズム前後の作品を中心に分析を行った。主な研究成果は以下の通りである。(1)FITが再現する意味領域が思考レベルから知覚レベルにまで拡張していくにつれて、登場人物の知覚・思考レベルの意識の交錯が、語り手の媒介を通さずに描かれる傾向が顕著になること、(2)FITが、形を整えていない流動的な意識を、書き言葉の口語化を通して(話しことばの形式的特徴を活かして)再現する手法を獲得していくこと。

研究成果の学術的意義や社会的意義

小説における意識描写の文体研究は、人間が自分の体験を内面化していくプロセス(自分の内面で起こる出来事を言語化していくプロセス)及びその再現方法を追究する作業である。本研究では、通時的な観点から意識描写の考察を行うことで、小説という言語芸術が、「意識的な意識(ある程度明確に言語化された意識)」を描く初期の段階から「形を整えていない流動的な意識(無意識や断片的な思考)」を再現する段階に至るまでの、言語実験のプロセスの一端を記述した。

研究成果の概要(英文)：This study examined the historical development of consciousness representation in English novels focusing on diachronic change in the form and meaning of free indirect thought(FIT). It made a stylistic analysis of the novels particularly before and after modernism, which have not yet been fully explored in previous studies. Throughout this study, I found: (1) as the semantic scope of FIT was extended from conceptual level to perceptual level, the interaction between these levels of characters' consciousness tended to be rendered more frequently with the illusion of immediacy, (2) the form of FIT gradually became colloquialized so as to represent unarticulated consciousness of characters.

研究分野：文体論、物語論

キーワード：意識描写 自由間接思考 小説 物語論 文体論

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

小説は、その始まりから今日に至るまで、個人の内面を探求し、描写していこうとする作家の試みとともに発展してきた。同時に、この試みは、目には見えない意識をことばで再現するための技巧を数多く生み出してきた。これらの技巧の中でも、とりわけ、自由間接思考(Free Indirect Thought: 以下、FIT)と呼ばれる言語形式が、これまでに物語論者や文体論者の関心を多く集めてきた(Stanzel 1984、Fludernik 1993、Sotirova 2013 参照)。

FIT とは、語り手が、登場人物の意識を通して、物語世界の出来事を描写する言語形式のことである。つまり、物語世界の中で起こっている出来事を「語る(telling)」のではなく、作中人物の意識を通して、「見せる(showing)」技巧である(Chatman 1978)。この時、読者は、物語の媒介者である語り手が姿を消し、まるで作中人物の意識の中を直接覗き込んでいるような錯覚を抱く(The illusion of immediacy: Stanzel 1984)。英国小説において、FIT は、特に 19 世紀リアリズム以降、登場人物の意識を再現する技巧として発展していき、20 世紀モダニズムになると、その形式と機能はさらに成熟していく。

英国小説における意識描写の先行研究には大きく 2 つの動向が見られる。1 つは、研究対象が、いわゆる「意識の流れ (stream of consciousness)」の技巧を生み出した 20 世紀モダニストたち(ヴァージニア・ウルフやジェームズ・ジョイス等)に偏っていることである(ただしジェーン・オースティンやヘンリー・ジェームズは例外)。この技巧は 20 世紀になって突如出現したものであるが、19 世紀以降(特にオースティン以降)発展してきた自由間接思考(Free Indirect Thought、以下 FIT) の言語形式が変容・進化する過程で誕生したものである(Sotirova 2013)。このような FIT の歴史的変遷に着目した通時的な研究は、Fludernik (1993, 1996)、Sotirova (2011, 2013)等がその必要性を主張しているにもかかわらず、未だ萌芽的な段階にある。

もう 1 つの動向は、FIT を扱う多くの先行研究が、知覚レベルの意識(登場人物の五感が捉える外の世界への感覚・知覚)と概念レベルの意識(登場人物の内面に起こる感情や思考)を区別することなく扱っていることである。Fehr (1938)、Brinton (1980)等は、早くから両者の言語形式の違いに注目しつつ、FIT を represented perception (再現された知覚)と represented thought (再現された思考)に分けて考察しているが、扱っている作家がモダニストに限定されている。最近では、Pallarés-García (2012)がオースティンの『エマ』の FIT を、知覚・概念レベルの意識の相互作用に着目して分析しているが、通時的な観点をもった FIT の考察は見られない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、19 世紀以降、作中人物の意識を再現するための技巧として発展してきた FIT の形式と意味を通時的な観点から考察することで、英国小説(英語圏小説を含む)における意識描写の歴史的変遷の一端を記述することである。

3. 研究の方法

本研究の方法は、以下の通りである。(1)FIT が再現する意味(意識のレベル)を知覚・思考レベルに分け、それぞれの言語指標を、Brinton(1980)のモデルを基盤にしながら設定する。本研究では、Brinton(1980)のモデルに、書き言葉の口語化(colloquialization)という概念を組み込む(cf. Sotirova 2011, 2013)。(2)事例研究として、意識描写の先行研究が少ないモダニズム以前の作品(サッカーの『虚栄の市』)とモダニズム以後の作品(マーガレット・アトウッドの『オリクスとクレイク』)を分析する。

4. 研究成果

(1)モダニズム以前の作品として、リアリズムの代表作品の 1 つであるサッカーの『虚栄の市』における意識描写の分析を行った。その成果をアメリカのウェストチェスター大学で開催された国際学会(Poetics and Linguistics Association)で発表するとともに、当学会が発行する Proceedings に投稿した。本論文では、従来 FIT を通じた意識描写があまりないとされてきた当作品においても、知覚と思考を巧妙に織り交ぜた意識描写が実践されていることを指摘した。ただし、『虚栄の市』の中で再現される意識描写(FIT)は、作中人物がどんな状況(興奮・怒り・驚き)であっても、ある程度論理的に整った(言語化された)意識であることも分かった。

(2)リアリズム作品では、書き言葉として再現された(文法的にある程度統制の取れた)意識描写が多いが、モダニズム以降の作品では、書き言葉を崩し、話しことばの持つ直示的、場面的、即時的な特徴を活かすことで、「形を整えていない流動的な意識(無意識や断片的な意識)を再現する試みが顕著に見られるようになる。このような「書き言葉の口語化」の傾向は、ポストモダン小説(特に現在時制小説の中では)では、さらに顕著になる。

(3)モダニズム以後の作品としては、近年普及しつつある現在時制小説の意識描写を取り上げて考察した。事例として、世界崩壊後の出来事が現在時制で語られるディストピア小説『オリクスとクレイク』(マーガレット・アトウッド作)の分析を行い、その一部を英国バーミンガム大

学で開催された国際学会 (Poetics and Linguistics Association) で発表した。またその内容の一部を当学会が発行する Proceedings に投稿した。現在時制語りでは、「会話」の基本時制である現在時制が「語り」の基本時制として用いられているために、書き言葉の口語化がかなり進行していた。本作品では、口語的な特徴 (並列文、省略、不完全文等の多用) が組み込まれた FIT (もしくはより直接的な意識描写である Free direct Thought : FDT) が、形を整えていない流動的な意識 (幻覚・妄想など) を効果的に再現していた。また現在時制と相性のよい直接的な知覚描写 (特に主人公の視覚を通した情景描写) が多いことも、作品全体の口語化と関係していることが分かった。

(4) モダニズム以降の作品になると、それ以前の作品に比べて、知覚描写 (特に視覚) が、登場人物の視点を通して直接的に描かれることが多くなる。また伝統的な小説に比べて、知覚描写と思考描写の相互作用がよりシームレスに描かれる傾向が強くなる。つまり「登場人物の五感を通した知覚が概念化 (内面化・言語化) されるプロセス」及び「登場人物の心理状態 (感情や思考) が知覚に反映されるプロセス」が、登場人物が直接体験したように (まるで語り手の媒介を通してないかのように) 再現される傾向が強くなっていく (cf. Stanzel 1984: the illusion of immediacy)。

(5) 本研究では、記憶を媒介にした回想形式の一人称自伝小説における意識描写の歴史的変遷についても調査した。事例として、カズオ・イシグロの処女作『遠い山並みの光』を扱い、伝統的な自伝小説との違いに着目しながら、イシグロの信頼できない語りを意識描写の観点から考察した。本研究成果の一部は、英国リバプール大学で開催された国際学会 (Poetics and Linguistics Association) において発表し、その内容を Proceedings に投稿した。本研究では、不安定な語り手の心理状態が「過去の記憶を歪めていくプロセス」に着目し、イシグロが、伝統的な自伝小説のように「思い出された記憶 (過去の「私」の体験)」を忠実に描くのではなく、「思い出すプロセス自体 (現在の「私」の意識体験)」をよりオーセンティック (authentic) に描こうとしていることを指摘した。本研究では、過去のトラウマ (長女の自殺) を直視できない語り手 (Etsuko) が、回想形式の語りの中で記憶を歪めていくプロセスを、言語・文体レベルで考察した。特に、人称代名詞の置換、語り手の現在の心理状態を喚起させる語彙の反復、長女の死 (首吊り自殺) を表象したイメージ等々に注目して分析した。

< 引用文献 >

- Brinton, L. (1980) Represented perception: A study in narrative style. *Poetics* 9(4): 363-381.
- Chatman, S. (1978) *Story and Discourse: Narrative Structure in Fiction and Film*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- Fehr, B. (1938) Substitutionary narration and description: A chapter in stylistics. *English Studies* 20: 97-107.
- Fludernik, M. (1993) *The Fictions of Language and the Languages of Fiction*. London and New York: Routledge.
- Fludernik, M. (1996) *Towards a 'Natural' Narratology*. London: Routledge.
- Pallarés-García, E. (2012) Narrated perception revisited: The case of Jane Austen's *Emma*. *Language and Literature* 21(2): 170-188.
- Sotirova, V. (2011) *D.H. Lawrence and Narrative Viewpoint*. London: Bloombury.
- Sotirova, V. (2013) *Consciousness in Modernist Fiction: A Stylistic Study*. London: Palgrave Macmillan
- Stanzel, F. K. (1984) *A Theory of Narrative*. Cambridge: Cambridge University Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Masayuki Nakao	4. 巻 -
2. 論文標題 Memory, Narrative, and Authenticity in Kazuo Ishiguro's A Pale View of Hills	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Online Proceedings of the Annual Conference of the Poetics and Linguistics Association. 2020, pp.1-14	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Masayuki Nakao	4. 巻 -
2. 論文標題 Post-Apocalyptic Narrative Style in Atwood's Oryx and Crake: Present-tense Rendering of Consciousness	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 On-line Proceedings of the Annual Conference of the Poetics and Linguistics Association(PALA)	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Masayuki Nakao	4. 巻 -
2. 論文標題 The Showman's Portrayal of States of Mind: Consciousness Representation in Thackeray's Vanity Fair	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 On-line Proceedings of the Annual Conference of the Poetics and Linguistics Association(PALA)	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Masayuki Nakao
2. 発表標題 Memory, Narrative, and Authenticity in Kazuo Ishiguro's A Pale View of Hills
3. 学会等名 Poetics and Linguistics Association(PALA)（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masayuki Nakao
2. 発表標題 Post-Apocalyptic Narrative Style in Atwood's Oryx and Crake: Present-tense Rendering of Consciousness
3. 学会等名 Poetics and Linguistics Association (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masayuki Nakao
2. 発表標題 The Showman's Portrayal of States of Mind: Consciousness Representation in Thackeray's Vanity Fair
3. 学会等名 Poetics and Linguistics Association (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----